

「あたりまえ」だったことが「あたりまえ」ではなくなった

労働者委員 岡良二

新型コロナウイルス感染症が日本に上陸してから3年がたとうとしています。未だに「未知のウイルス」であり、感染対策も曖昧な状況です。第7波はオミクロン株の新系統 BA.5 で「重症化はしないけれど感染力が強い」ことだけは早い段階で分かっていました。しかし対応の遅れなどから病院や救急隊、保健所など医療や介護の現場は破綻状態に陥りました。ピークが落ち着きを見せ始めた頃に「全数把握の簡略化」「療養日数を短縮」「みなし療養」など後手の対応がとられ「オミクロン株」に対応した予防接種が進んでいます。本当に「これでいいのか？」と考えさせられます。第7波では、死者数が過去最多を記録しているなかでも「人命より経済優先」に物事が進んでいることが大きな問題です。「感染症」が流行り始めた頃は鹿児島でも1人、感染したら「何処の誰」と噂話が始まり、コロナ患者とわかれれば、その街から出ていかなければならないような雰囲気でした。今では、一日の感染者数が2千人や3千人でもびくつきしないようになってしまいました。「三密を避け」「不必要な外出を避ける」「リモート出勤」「学校閉鎖」「新しい生活様式」など多種多様の対策が講じられてきました。人の移動制限がかかることにより各産業は大きなダメージを受け特に「旅行業」「交通運輸産業」「飲食業」は一私企業では成り立たない状況まで追い込まれています。国や自治体では、産業の維持・活性化を図るべく支援や補助を打ち出し、何とか産業が持ちこたえている状況です。私自身、「交通運輸産業」に携わっておりますが政府による制限により運収は激減し運行数を減らさざるを得なくなりました。運行本数を減らせば「あたりまえ」だった人の移動が「あたりまえ」ではなくなり、お客様に不便な思いをさせている状況です。飛行機、鉄道、バスには支援金や補助がありますが、鹿児島空港には「ハンドリング業務」と言われる職業があり、この職業には支援も補助もありません。「ハンドリング業務」の労働者は空港の裏方で「お客様の荷物を預かり行く先まで安心・快適にお届けする」業務を行っていますが、コロナ禍による飛行機の減便で仕事が無くなり離職者が続出しました。現在、飛行機の運行本数が元に戻りつつありますが「ハンドリング業務」を行う労働者が不足し一人で二人分の仕事をこなしている状況です。決して目立たない職業ではありますが、この方々がいなければ飛行機の運行が「あたりまえ」にできない事をご理解いただき「ハンドリング業務」の労働者がいて今日も飛行機が飛んでいるんだと思っていただければ幸いです。この感染症の拡大により今まで「あたりまえ」だったことが「あたりまえ」ではなくなったのです。これからも「新型コロナウイルス」は変化し続け、私たちはコロナと共存していかななくてはならないはずです。完璧な対策は無いと思いますが、コロナ株の症状に合わせた迅速な対策が今後、求められる大きな課題だと感じています。